

東京YMCA

11
2019年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

日米の懸け橋として



異文化で生きる子どもたちと共に



本間立夫・恵美子夫妻にはその功績をたたえ、菅谷淳総主事より記念の盾が贈られました。

「東京・フロストバレーYMCAパートナーシップ」が40周年を迎え、東京YMCA東陽町センターで10月19日、記念感謝会を開催しました。この活動は1979年、当時急増していたニューヨ

「東京・フロストバレーYMCAパートナーシップ」40周年

ーク近郊の日本人駐在員家族のために東京YMCAの本間立夫主事が赴任し、キャンプやフィットネスなど多様なプログラムを開拓したことから始まりました。91年には参加者増に伴い、マンハッタンから北西200キロに広大なキャンプ場をもつ「フロストバレーYMCA」とパートナーシップを締結。以後も継続してスタッフを派遣し、日本語を使ったキャンプなど、プログラムを提供し

ています。感謝会には初代ディレクターを務めた本間立夫・恵美子夫妻がアメリカから来日したほか、香港、福島県、群馬県など各地からリーダーやキャンパーOB・OG、歴代の駐在スタッフほか、パートナーシップに関わりのある121人が集まりました。第一部では徳久俊彦氏（学校法人東京YMCA学院理事長）の奨励による礼拝が持たれ、またパートナーシッ

プに縁のある4人の方から思い出が語られました。多くの人を育てたこのパートナーシップの働きを振り返りながら、旧交を温めました。第二部は、元リーダーやキャンパーを中心に、懐かしいゲームをしたり、自己紹介をするなど、世代を超えてフロストバレーでの経験を共有しながら、楽しい時間を過ごしました。リーダーだった人たちの子どもがキャンパーやリーダーにな

なり、パートナーシップが次世代へ引き継がれていることを感じました。フロストバレーで育った皆さんがアメリカ、日本、世界中で活躍されていることを喜びと覚えま

す。今後もこのプログラムが日米の懸け橋の役割を果たしていくことを期待しています。引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。
(2013〜2018年度駐在ディレクター／現：南セクター 池田麻梨子) 治邦

台風15号19号復興支援へ

スタッフ派遣など開始



9月9日に千葉県を中心に猛威を振るった台風15号と、10月12日に関東と東北地方に甚大な被害をもたらした台風19号の被災者支援のため、全国京YMCAは主に長野県

を、ぐんまYMCAは福島県を担当するなど全国各地で支援先を分け、それぞれのニーズに合わせて活動しています。東京YMCAは千曲川の決壊により大きな被害を受けた長野市北部に学生や職員を派遣して泥かき作業を行なうほか、東京YMCAと関係の深い社会福祉法人賛育会の豊野事業所にも職員を派遣しています。

泥かきの目途がたつた後には、リフレッシュキャンプなど子ども心のケアにも取り組む予定です。全国での目標募金額は3,000万円。活動の進捗は、随時ホームページでお知らせします。ご協力をお願いいたします。
<http://tokyo.ymca.or.jp/support/>
▼4面＝募金のお願い

連続講演会「生きづらい社会を生き抜くために」

ひきこもりは犯罪者予備軍ではない

「ひきボス」編集長 石崎森人さん講演



【石崎森人さん】信メ編集長
ひきこもり当事者「ひきボス」編集長
ディア一般社団法人ひきこもりU-X会理事

今年5月に川崎市で起きた殺傷事件以降、ひきこもりが犯罪者予備軍かのような発信が目立つことから、東京YMCAオーフンスペースlibyは「生きづらい社会を生き抜くために」と題して連続講演会を企画。第一回は山手センターを会場に10月5日、「ひきボス」編集長の石崎森人さんにお話を聞きました。

と、当事者や経験者の声を発信しています。川崎市の殺傷事件の際には、NHKが「犯人はひきこもり傾向にある」と報道したのに対して「犯行の動機ではなく、ひきこもりという状態と犯行を結び付ける報道は偏見を生む」と発信。次々とマスメディアに取り上げられ反響を呼びました。

講演の冒頭で石崎さんは、ご自身がひきこもっていた時の心境について「自分はだめな人間だ」という自己否定感と焦りから頭痛や吐き気も起こり、死にたいと思いつづけていた」と説明。近所の人に無視されたり、ひきこもりの人には価値がないといった世間の目に傷つくこともあったといいます。またひきこもった原因については「幼少期から自己肯定感や他者への信頼が築けず、主体的に生きる力がなかった。生きづらい価値観から脱却できなかった」と振り返りました。

その上で石崎さんは川崎市の事件が、ただでさえ自己否定感の強いひきこもりの人を追い詰めてしまうと危惧。実際に当事者や家族から「そのうち殺人者になってしまうのか」「親からも犯罪者予備軍と見られるようになった」などの相談が増えたと言います。けれども「ひきこもりの人はそもそも他者を攻撃できない人が多く、一般の人よりも犯罪率が低いというデータもある。まずは自分を大切にしよう。それが、社会全体が生きやすくなる一歩になるのではないか」と話しました。

第二回講演会は2月1日、ひきこもりU-X会議代表理事の林恭子さんを講師に開催予定です。

赤△三角

台風15号と19号の被害は予想を超える激しいものとなった。被災された皆さまへ心からお見舞いを申しあげると共に早期の復旧を祈りたい▼台風後に私は、外房と長野で知人宅の泥かきと木の伐採の手伝いをした。房総では多くの倒木が道路を寸断し、電線を切り、電柱を倒していた。長野では堤防が決壊し、家や仕事場が泥水に飲み込まれていた。自然の猛威を目の当たりにし、人の思うままにならない自然への畏怖を感じざるを得なかった▼あらためて、人間は自然を構成する一員に過ぎないと思い知った。

自然と共にある生き方を見つめること。自然への畏敬の念を忘れずに、常に備え、人と人が互いに助け合うことが重要だと痛感した▼かつて長野の寒村に住む方から教わったことがある。「この辺は自然が厳しいから、お互い人には優しいんだ。人と人が助け合って生きるから、こんな場所でも楽しく生活できる」と。おそらく沖縄や九州など頻繁に台風が通過する地域にも、相互の助け合いで凌ぐ知恵があるのではないかとも思う▼もはや災害は想定外や予想外と言言葉で看過できない時代に入った。「備えよ、常に！」である。
(グランチャ東雲 諏訪 治邦)

オピニオン

持続可能な開発目標 (SDGs) と YMCA

寄稿

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



「持続可能な開発目標 (SDGs)」として2015年に国連で採択された17の国際目標

子どもたちのメッセージから
1992年の地球サミットで当時12歳のカナダの少女セヴァン・カリスが次のように語っています。「私の国での無駄使いは大変なものです。買っては捨て、また買っては捨てていく。そして、そんなにたくさんの物を無駄にしていく北の国は、物が不足している南の国と分かち合おうとはしません。物があふれているのに、私たちは自分の富を少しでも手放すのがこわいのです。もし世界中の国の大人たちが戦争のために使っているお金を全部平和のために使えば、環境や飢餓の問題のために使えば、この地球がすばらしい星になるでしょう。私はまだ子どもですが、それでもこのことを知っています」。(注1)

当時彼女は「子どもと環境活動(略称ECO)」というクラブを作り活動していました。1990年代は、国際会議への子どもの参加(注2)が進められたほか、市民団体が招かれたり、国際会議と並行して市民会議が開かれ、意見を反映させたりすることができるようになりました。現在39歳になったセヴァンは環境活動家となっています。

このメッセージには、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」を理解し、達成するために行くべきことのすべてが集約されています。

2002年、南アフリカの都市ヨハネスブルクで、地球サミットと並行して開催されたNGOフォーラムに、市民団体(注3)として

参加したときに私は、子どもサミットが同時開催され、世界中から子どもが集まり、議論している様子を目の当たりにしました。

そして今年9月、国連の気候行動サミットに招待されスピーチを行ったスウェーデンの16歳の環境活動家グレタ・トゥーンベリが行った「多くの人たちが苦しんでいます。多くの人たちが死んでいます。すべての生態系が破壊されています。私たちは大量絶滅の始まりにいます。」という強いスピーチは、さまざまな反応を引き起こし、議論を巻き起こしました。

これら子どもたちの関わりから二つのことが言えると思います。

子どもを対等なパートナーに
一つは、「SDGs」ができた背景にはこうした長い世界的な議論があったにもかかわらず危機的な状況が進行しているという現実です。これまでたくさん「世界をよくするため」の「目標」が掲げられてきましたし、それに向けて努力もなされましたが、危機的な状況は悪化する一方だという子どもたちの指摘は、本当に聞き入れられてきたのでしょうか？もし本当に大人が「子どもたちの意見を聞いている」というならば、共に行動に移し、社会を変えていこうという現実となつて現れなければならぬと思います。

二つめは、子どもと大人の対等な関係が真に問われているということです。セヴァンのスピーチとトゥー

- 注1 『あなたが世界を変える日-12歳の少女が環境サミットで語った伝説のスピーチ』セヴァン・カリス＝スズキ著 学陽書房、2003年
- 注2 2019年は、子どもの権利条約が採択され30周年(日本の批准からは25周年)となりより一層子どもの権利の推進が期待されています。
- 注3 認定NPO法人開発教育協会。開発教育の実践研究団体で、教育分野の政策提言も行っている。
参考URL <http://www.dear.or.jp>
- 注4 『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』ロジャー・ハート著 木下勇・田中治彦・南博文監修、萌文社、2000年

ンベリのスピーチの内容は基本的に変わりません。にもかかわらず、トゥーンベリのスピーチには一部の人から批判的な意見が出ていました。「地球破壊はそれほど深刻ではないという科学的データが出ている」という意見すらありました。本当にそうでしょうか？ それだけ現実が厳しいということを表しているのではないのでしょうか。子どもたちが「お節り参加」(注4)ではなく対等なパートナーとなつたとき、私たちの態度が真剣に問われます。

YMCAに求められるもの

YMCAは子どもに関わる団体であり、若者が中心となつて始まり、今でもその精神は引き継がれています。YMCAのSDGsへの取り組みは、子ども、若者が主体であると思います。YMCAの活動で、学校で、ご家庭で、子どもたちと学びを深めることは、YMCAらしいSDGsへの取り組みといえるのではないのでしょうか。

褒められた記憶



私の幼少時代を一言で表すと、落ち着きのない子、という表現がよく合います。物心のついた頃、母からは私の落ち着きのないエピソードをこんこんと聞かされたものです。個人的には失敗が多かったと振り返る幼少時代でしたが、35歳になった今でも忘れない、褒められた記憶があります。

4歳くらいだったある時、手洗いをしていたところ、なじみのあるおばさんが「晴彦くんは手を上手に洗えるのね。えらいわねえ」と褒めてくれました。その時、自分では意識していたわけでもなく、いきなりのことだったので、ただただ恥ずかしがることしかできませんでした。しかしながらその後、じわじわとそのことを嬉しく思い、誇らしく感じたことを30年経った今でも思い出します。その後の自分が継続して手洗いが上手にできていたかは分かりませんが……。

た記憶がおりるかと思ひます。人は誰しも承認欲求という潜在意識があると言います。人は人に対して自らの認知・肯定を求める。つまり「誰かから認められた」という社会的な欲求をもっているのです。だからこそ子どもでも、大人でも褒められれば嬉しく思い、自己肯定・生きる力に繋がっていきます。人はついつい、できない部分・足らない部分に目を向けてしまいがちです。だからこそ私は保育者として、できないことより、できることに目を向け、常日頃関わる子どもたちと共に

自分を肯定する力を育めればと思います。

私は現在、港区立芝浦アイランド児童高齢者交流プラザで学童クラブを担当しています。私は自分の褒められた経験をもとに、子どもたちの良いところを受け止め、小さいことでもたくさん子どもたちを褒めてあげたいと思います。

そして子どもたちが自分だけの褒められた記憶を糧に大きく羽ばたいてくれることを願います。

芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ学童クラブ 主任 野澤 晴彦



東京YMCA総主事

菅谷 淳

総主事カフェ
00円ショップに寄つて小さな茶碗を購入。毎朝のご飯を100グラムに抑えてカロリーと糖質を抑えるダイエツトを開始しました。筋肉の衰えを補う意味で「フランク」という体幹トレーニングも同時に始めました。一人では長続きしないと思つてお腹まわりを気にしている妻を半ば強引に巻き込んで6ヶ月、なんと9キロも痩せたのです。ダイエツト中に気づいたことが三つあります。一つは空腹時のつらさ。次の食事の1〜2時間前から早く食べたことで

うがなくなります。これはつらい。二つ目は何を食べてもおいしいこと。味付けは二の次であり、気になります。ダイエツト前はそれほど好きではなかった物も「こんなにおいしかったっけ？」と舌を疑うほど本当においしいんです。これは新発見でした。三つ目は世界でお腹をすかして苦しんでいる貧しい子どもたちのことを気にかけることが多くなったことです。もちろん私の空腹は命を危ぶむほどの空腹とは違いますが――。

「これはいかに」と今年の5月、仕事の帰りに1

次

国連による最新の「世

な？

界の食料安全保障と栄養の現状」報告書によると、世界の飢餓人口は3年連続で増加して、2018年はおよそ8億2000万人が十分に食料を得られなかったとのことでした。これは国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」の第2の目標である「飢餓をゼロに」を達成するための大きな課題となっていると指摘されています。

私たちが取りすぎている食事や大量に廃棄している食料を見直し、世界的な富のアンバランスを解消して今こそ国レベルでダイエツトする時代が来たのではないのでしょうか。

それにしてもお腹がすきました。ご飯、まだか

■ハンセン病資料館を歩く

西東京センター ウォーキングの集い「ペタペタの会」

西東京コミュニティーセンターの会員の企画で2013年から開催しているウォーキング「ペタペタの会」。第13回となった11月2日は、東村山市にあるハンセン病国立療養所「多磨全生園」を歩きました。以前は隔離されていた全生園ですが、今は広く一般に開放されており、参加した8人は入所者が植えたという緑豊かな園内を1時間ほど散策。その後、園内にあるハンセン病資料館を、学芸員の説明を聞きながら見学しました。自由を奪われ、家族も差別を受け、時には命が奪われた事実に関心を感じていましたが、その中で自由のために闘った姿に力強さを感じることができました。ハンセン病の理解を深めると共に、現代にもある差別や偏見などを考えるひと時となりました。



(会員部・コミュニティーセンター統括 中里 敦)

■飯靖子さん・顕さんと 青山学院女子短期大学がチャリティーコンサート

第4回「liby・東京YMCA高等学院を支えるためのチャリティーコンサート」が10月4日、日本基督教団霊南坂教会で開催されました。本会理事で同教会オルガニストの飯靖子(いい・せいこ)さんが発起人となり、ご自身が指導する青山学院女子短期大学グロリアスクワイアとヴィオラ奏者の飯顕(いい・あきら)さんが出演してくださいました。



オルガンソロで始まった第1部は、ヒンデミットのヴィオラの現代的な音色とシューマンやアルビノーニのオルガンとヴィオラによる古典的曲調と様々に楽しめる時間でした。第2部のハンドベルは、時折トーンチャイムも入った素晴らしいハーモニーでした。ベルでテーブルを叩いて打楽器のような音を出す演奏法もあって驚かされました。大きいものでは5kgものベルを腰とひざで振りながら、本当に楽しそうに演奏してくださいました。

最後は高等学院の生徒と保護者教員有志が「世界に一つだけの花」を歌いました。顕さんのギター伴奏と伊藤幾夫さんのオカリナ演奏も入り、笑顔で締めくくることが出来ました。来場者は150人にのぼり、合計298,718円のご厚志が寄せられました。会場を提供してくださった霊南坂教会、そしてご協力くださった皆さまに感謝を申し上げます。(高等学院 校長 井口真)

キャンプソングフェスタ～ 歌を楽しむ3時間～

東京近郊のYMCA・YWCA有志100人が歌う

「キャンプソングはキャンプの文化そのもの」と言われるほど、YMCAのキャンプではたくさんの歌を歌います。スタッフやリーダーが作詞作曲したものや、キャンパーの詩を歌にしたものなどオリジナルソングも多く、中には『静かな湖畔』や『ね』のように、学校の唱歌として広まったものもあります。



そんなキャンプソングを歌おうと10月6日、千代田区の東京YWCA会館で初の「キャンプソングフェスタ」が開催されました。主催は東京YWCA。協力団体として日本YMCA同盟と有志による「キャンプソングの会」が関わり、茨城・埼玉・とちぎなど関東近郊の8YMCAから100人が集合。東京YMCAからも「山中家族キャンプ」のメンバーなど約20人が参加し、『大きな歌』『ズンゴロ節』『ほほえむソング』『ロックマイソウル』など全30曲を3時間にわたって歌い続けました。

曲間には、作詞作曲者自身が曲の紹介するコーナーもあり、参加者のアンケートには「キャンプソングの背景も知ることができて、今まで以上に好きになりました」「キャンプソングは財産ですね」「親子で楽しめました」などの声が寄せられました。(広報室)



2019年度 表彰賛助会員

- 継続50年
株式会社木村洋行
株式会社小小学館
日本電波工業株式会社
パナソニック株式会社
- 継続25年
清水井産業株式会社
理想科学工業株式会社
- 継続20年
京王観光株式会社 東京南支店
株式会社集英社
株式会社トップナッチツウリスト
- 継続15年
株式会社ツカサ・エンタープライズ
- 新入会
株式会社AOKI
株式会社喜久多
株式会社田中屋
株式会社t e c o
一般社団法人マザーリングマネジメント協会
株式会社ライセンスアカデミー

「賛助会年会・アドバイザー会 企業の支援に感謝して」

日ごろ東京YMCAを支えてくださる企業・団体およびアドバイザーを、区の学生会館で「賛助会年会・アドバイザー会」を開催。賛助会企業30社とアドバイザー、評議員など約60人が集まりました。「賛助会」は東京YMCAのいわば法人会員による組織で、現在約130社が加入しており、年会費による支援のほか、バザーなどイベントのサポート、災害復興支援、障がいのある子どもたちの活動等への協力・協賛など、東京YMCAの公益活動を物心両面から力強く支えてくださっています。

この日は古賀博評議員が会長あいさつに続き、氏家純一賛助会会長(野村ホールディングス株式会社名誉顧問)から日ごろの感謝を述べ、また賛助会員となつて継続5年毎の節目にある企業へ感謝状と記念品を贈呈したほか、新規で入会された6社の紹介もありました。

多くの企業の協力によって多彩な青少年活動が展開できることをあらためて感謝し、閉会しました。



東雲コミュニティーセンターでの輪投げコーナー



東雲では事前に、ゴキブリや衣装を作る教室を開催。ミサグロなど身近な材料でマントドレスを作りました。

江東区東雲(しのめ)地域で10月30日、東京YMCAが運営する保育園など5カ所を回るスタンブラリー「わいわいハロウィン in しのめ」を開催。地域の子どもたちやYMCAの園児など、色とりどりに仮装した親子約1000人が参加しました。

このイベントは「東雲地域のふさと作り」を目的に、東京YMCAがこの地域で運営している「江東区児童・高齢者総合センター」を会場に、事前には、ゴキブリや衣装を作る教室を開催。ミサグロなど身近な材料でマントドレスを作りました。

「第5回 わいわいハロウィン in しのめ」 小さな子どもも安心、親子連れ1000人が参加

ロウインをコンセプトに開催しており、3年ほど前からUR都市機構も協力くださっています。

今年も文具やお菓子などの景品を用意したほか、オリジナルのフォトスポットや学生ボランティアによるお化け屋敷、輪投げコーナーなどを設置。職員も思いっきり仮装して出迎えました。

訪れた子どもたちは忍者や海賊、プリンセスなど、お気に入りの仮装で「トリック オア トリート!」。中にはシートに描かれたお化けの衣装を着て、お化け屋敷を怖くなく通りました。

「明日もドレス着たい」など名残を惜しむ声が聞こえました。

なお今年は地域の皆さまもボランティアでお手伝いくださいました。この場を借りてお礼申し上げます。

(広報室)